

「理想的ではない」型のコミュニケーションはコミュニケーションか？

ishii05042 (a) venus.joshihi.jp

～「受容理論」、理論的考察、相互前提関係 について～

おの  
古寺に斧こだまする寒さかな

わが恋は空のはてなる白百合か

「作品というものは、読まれることによって初めて成立する。作品とは、あたかも「実体」のように存在しているのではなく、認識する者との関係が不可欠である。読むという行為において、読み手はこれらの句の背後に（意識するしないにかかわらず）虚焦点としての作者を想定しており、そこから読み取ってくるものは実は読み手の心情や思想にほかならないのだ。実作者の存在する俳句においても実は同じことが起っている。その意味で、作者は読み手なのだ」

※ 上記の俳句は、実はコンピュータが作成したもの。つまり、作者はコンピュータである。人間ではない。ならば PC という真の作者を知る前に、各自が俳句から読み取った内容は、一体、どこからきたものか。また、最初にコンピュータが作ったと知らされていたならば、もとより、先ほどのように、内容を真剣に読み取らんとする意欲は沸いたであろうか。

黒崎政男『哲学者はアンドロイドの夢を見たか』東京：哲学書房、1987年、123頁。  
（参考）大橋洋一『新文学入門』東京：岩波書店、1995年、90頁。

## テキスト text

- ・「従来は教科書とか、文学作品等の本文という意味で使われるのが普通であったが、1960年代から、ことにフランスの構造主義以降の思想の影響を受けて、作品 (work) とは別の意味で使われるようになった用語。現在では文字で書かれたものの他に、絵画や映画、写真、図像についても使われる」（富山太佳夫「テキスト」『岩波哲学思想事典』1117頁）。
- ・「テキストは、作者との関係から独立した意味を常に生産する。テキストは読者と相互作用を起こし、読者によって生産され、悦楽、、、の源である。これに対して、『作品 (work)』は、、、作者から独立していない」（ジョゼフ・チルダーズら「テキスト」『コロンビア大学現代文学・文化批評用語辞典』東京：松柏社、399頁）。

## 受容理論（受容美学，読者反応批評） reception theory

- ・「批評理論は、20世紀のある時期に、作者からテキストを経て読者へと関心の中心を移していったといわれる（※1970年代ごろ）。しかしそれはすでに30年以上も前のことである。それ以後さまざまな理論が登場し、今日、批評理論の関心は、テキストと読者をつつむ政治的歴史的コンテクストに移っている」（丹治愛編著『批評理論』講社選書メチエ、2003年、32頁）。
- ・受容理論の主要論者 ヴォルフガング・イーザーは、それまでの「作者の意図」に合うことに正統性を求める読み方を批判し、「『テキスト』と読者の相互作用によって読書行為が行なわれる」とした。「読者は、読書行為の中で、自分と『テキスト』との『空所』を自らの内面世界から補充し、意味の結合によって繋げたりして、自分の一貫した解釈を構成しようとする」。しかし、時に読者はその解釈の一貫性が破綻していることを知り、テキストからかかる解釈を「否定」される。かくして、ますます読者は、解釈に熱中し、「テキスト」を読み返し、思考を繰り返し、やがて決定的な解釈と出会う。（鎌田首治朗「イーザーの読者論再考」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部第62号、2013年、152頁）。

## 「含意された作者」（想定された作者） implied author

- ・「作品から想定されるのは、、、作品を説明できるような統一的な意図を持った仮説上の作者です、、、想定された作者というのは、実作者の歴史的存在を捨象した存在であり、結局、「わたしたち読者が作っていることとなります」（大橋『新文学入門』89-91頁）。
- ・「含意された作者」の概念は、もともとウェイン・ブースが提唱したもの。この概念から、後にイーザーは「含意された読者」を論じた。

「落葉していること」。それは、  
 発信者が、コミュニケーション  
 のために、落葉させたのではなくて、  
 「自然科学」の法則で「落葉」したもの。

なので、「落葉」は「発信者」が  
 コードを参照して創り出した  
 事柄ではない。

発信者がいなくても、自然科学の法則によって  
 「落葉」する。

「秋になったら落葉する」  
 コード（自然科学）

「コミュニケーションとは、言うならば、  
 自分が頭の中に抱いている〈抽象的〉  
 な広義の思考内容のコピーを  
 相手の頭の中にも創り出す行為であると言える」  
 (P.37)。



コンテキスト



発信者（「自然」）？

?

落葉した葉



落葉した葉

受信者

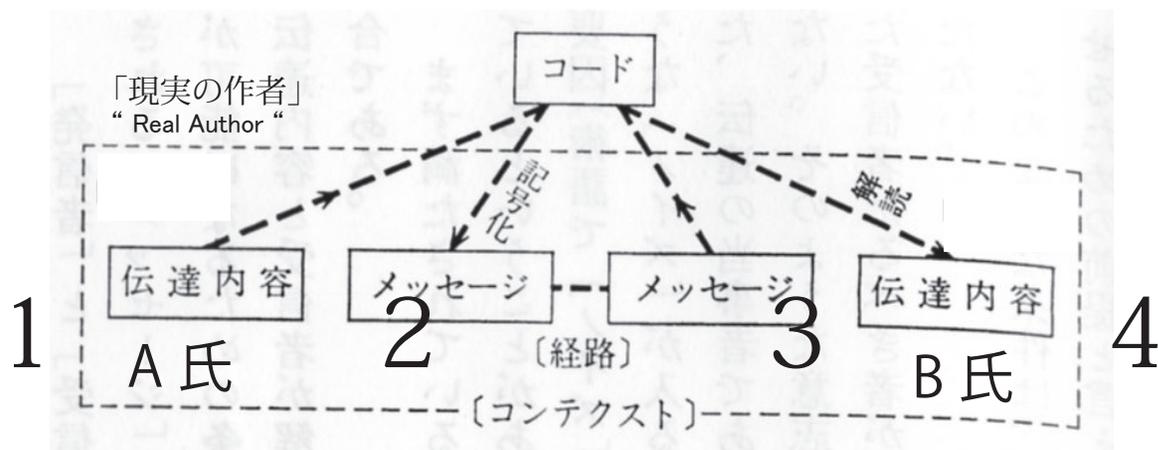
「秋になったら落葉した」

※ しかし、発信者の表現ではなく、  
 自然科学による現象では？  
 そのコミュニケーションの初動である  
 「作者の意図」は認められないのでは？

論点 1. 発信者が不在なら、やはり、その定義上、そもそもコミュニケーションは成立しないのでは？

論点 2. 仮に発信者が存在したとする。しかし、「落葉」というメッセージが存在するに至った経緯を考えれば  
 それは自然科学の法則によって現れた現象なのであり、発信者がコードを参照して「表現」したものではない。  
 ならば、上のコミュニケーションの図式は当てはまらないのではないか？

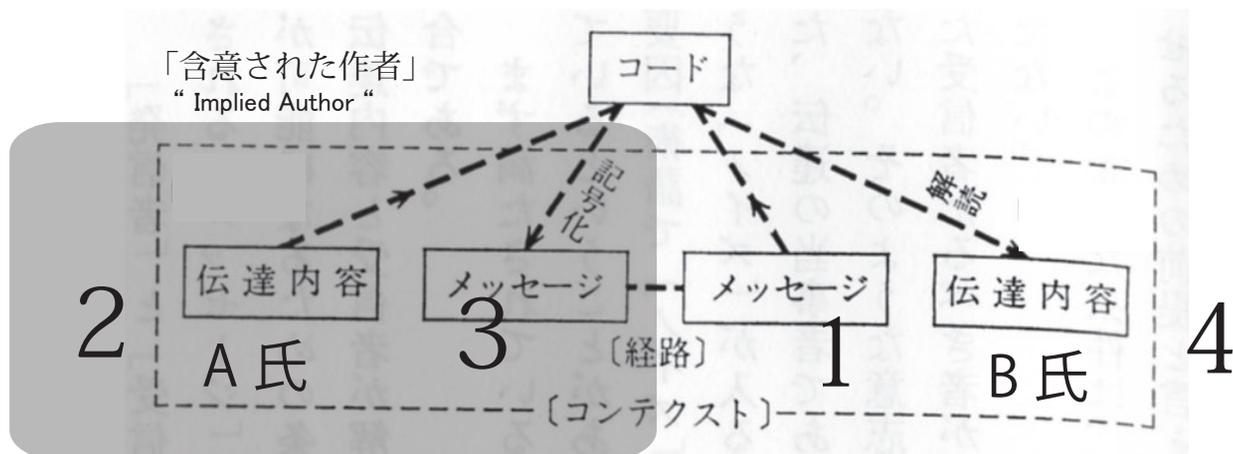
## コミュニケーションのモデル



### ●「理想的」コミュニケーション（「コード依存」－「解読」－「発信者中心」）

- ・上記の「コミュニケーションのモデル」の次元で考察している（なので「コミュニケーション」である）。
- ・A氏は実在する（「現実の作者」“Real Author”）。
- ・A氏はB氏へ情報伝達をすべく、積極的に発信する。
- ・「メッセージ」化で使用するコードは、明確に定められており、A氏とB氏の両者間で共有されている。

## コミュニケーションのモデル



### ●「理想的ではない」コミュニケーション（「コンテキスト依存」－「解釈」－「受信者中心」）

- ・上記の「コミュニケーションのモデル」の次元で考察している（なので「コミュニケーション」である）。
- ・A氏はB氏へ情報伝達をすべく、積極的に発信しない。
- ・「メッセージ」化で使用するコードは、明確に定められておらず、A氏とB氏の両者間で共有されていない。
- ・「コード」に妥当性がある場合、一般的には「推論」と呼ぶ。
- ・「コード」に妥当性がない場合、「仮説形成」となる。
- ・B氏は、「含意された作者」を想定しないと「メッセージ」を解釈できない。
- ・「理想的な」コミュニケーションの存在が前提となっているために、「理想的ではない」～が存在できる余地が確保される。

## よい子のモデル

「ぼうやはよい子だ “ねんね” しな」



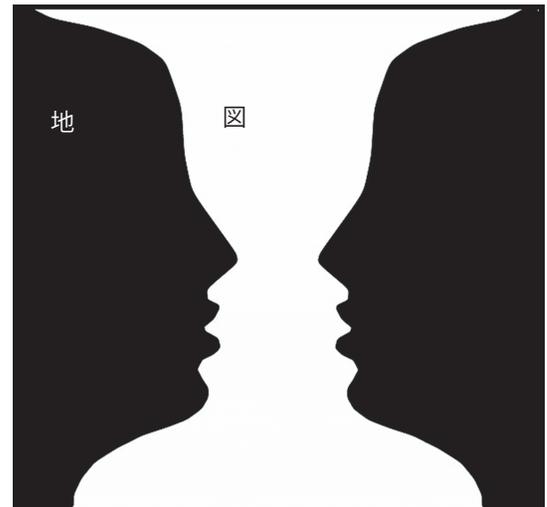
### ●「理想的な」よい子

- ・「よい子のモデル」の枠組みで考えている
- ・“ねんね”する

### ●「理想的ではない」よい子

- ・「よい子のモデル」の枠組みで考えている
- ・“ねんね”しない
- ・一般的にはヤンキーという
- ・「理想的なよい子」が存在するので「理想的ではない」が存在できる。

## 「ルビンの壺」



- ・「図」が存在するので「地」が存在できる  
(相互前提関係)

### ●さらなる知識のために (受容理論、その他、批評理論全般の初歩的な知識習得のために)

- ・筒井康隆『文学部唯野教授』東京：岩波書店、1990年 (小説。物語内での唯野先生の批評理論講義は確かな内容。痛快でためになる。受容理論講義あり)。
- ・丹治愛編『批評理論』東京：講談社選書メチエ、2003年 (様々な批評理論の解説と、それぞれの批評的視点による分析の実践例。受容理論解説あり)。
- ・廣野由美子『批評理論入門：「フランケンシュタイン」解剖講義』東京：中央公論新社、2005年  
(様々な批評理論の解説と、それぞれの批評的視点に基づいたフランケンシュタインの分析。わかりやすい。受容理論解説 [読者反応批評]あり)
- ・土田知則ら『現代文学理論：テキスト・読み・世界』東京：新曜社、1996 (読みやすい概説書。受容理論解説 [読者の誕生]あり)。
- ・テリー・イーグルトン『新版・文学とは何か：現代批評理論への招待』東京：岩波書店、1983年=1997年  
(本格的に学びたい人は必読。基本資料として位置づけられるもの。受容理論解説あり)。
- ・大橋洋一『新文学入門：T・イーグルトン『文学とは何か』を読む』東京：岩波書店、1995年 (示唆深い良書。受容理論解説あり)。
- ・川口喬一・岡本靖正編『最新・文学批評用語辞典』東京：研究社、1998年 (手軽で適切な文化批評用語辞典として)。
- ・ジョゼフ・チルダーズら『コロンビア大学・現代文学・文化批評用語辞典』東京：松柏社、1995年=1998年  
(本格的に学びたい人は揃えたい辞書)。
- ・菅原教夫『現代アートとは何か』東京：丸善ライブラリー、1994年  
(批評理論を知るための大前提。批判的に検討すべき「西欧近代主義」についての基本的な知識のために。第2章と3章を読みたい)。
- ・鎌田首治朗「イーザーの読者論再考」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部第62号、2013年。  
(学術論文だが、初学者がヴォルフガング・イーザーの受容理論を知るためにも最適。読みやすく優れた論文)。